

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（平成27年）

徳島県立保健製薬環境センター

嶋田 啓司・片山 幸・市原 ふみ

Infectious diseases surveillance reports in Tokushima Prefecture in 2015

Keiji SHIMADA, Miyuki KATAYAMA and Fumi ICHIHARA

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

I はじめに

当センターでは、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に周知することにより、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、平成27年1月から12月までの患者発生状況についてまとめたので報告する。

II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の86疾患（全数把握対象疾患）、指定届出機関から届出を受ける25疾患（定点把握対象疾患）とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は月曜日から日曜日までの1週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

III 結果及び考察

1 全数把握対象疾患の届出状況（表1）

(1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2) 二類感染症

① 結核

平成27年の届出数は149件と前年（153件）とほぼ同数であった。月別の届出数では、11月（4件）を除き9～20件で推移し、季節的な特徴は見られなかった。症状別では、「患

者」が108件と最も多く、「疑似症患者」は5件、「無症状病原体保有者」は36件であった。届出患者を年齢別にみると、60歳未満では各年齢層とも10件前後の届出数であったが、60歳を越え年齢が高くなるにつれ大きく増加し、60歳以上が全体の約7割を占めた。性別では、男性68件、女性81件と女性が男性よりやや多く届出られた。

年齢層別に症状を比較した場合、60歳を境として大きく異なった。すなわち60歳以上では「患者」が約88%と大部分を占めたのに対し、60歳未満では「患者」と「無症状病原体保有者」が24件ずつ同数報告された。さらに「無症状病原体保有者」の職業別では医療・介護などの施設関係者が約31%を占めていたことより、施設関係者に対する感染予防啓発、施設における施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

(3) 三類感染症

① 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は、平成23年以前においては毎年13～27件報告されていたが、平成24年以降減少し、平成27年も10件と届出数は少なかった。これは厚生労働省による生食用食肉の規格基準改正（平成23年10月より）と生食用牛生レバーの提供禁止（平成24年7月より）により生肉・生レバーの喫食が原因となる事例が減少したためと推察される。

月別の届出数は、6～9月が7件と夏季に多く見られ、その他の季節では10～11月に3件届出られただけであった。診断の類型は「患者」が8件、「無症状病原体保有者」2件と「患者」の割合が多く、年齢別では10歳未満から60歳代まで幅広い年齢層から報告されたが、20歳代以下が7件（内10歳未満5件）と若年者から多く報告された。また、血清型別では、本疾患の多くを占めるO157やO111の他に、O103などの血清型も報告された。

報告例の感染経路や感染源は、潜伏期間が2～14日と比較的長いこともあり原因の特定には至らなかったが、全て国内にて感染したと推定された。

(4) 四類感染症

① A型肝炎

A型肝炎は、1件届出られた。50歳代の男性で、本疾患は潜伏期間が2～7週間と長いため感染経路の特定には至らなかったが、県内で感染したと推定された。

② 重症熱性血小板減少症候群

重症熱性血小板減少症候群は、3件届出られた。届出月はマダニの活動時期にあたる6～9月に集中し、感染経路は全例、レジャーや畑作業などの野外活動時、県内にてマダニ等に刺咬されたと推定された。徳島県では本疾患をはじめ、つつが虫病、日本紅斑熱など原因微生物を保有するダニや昆虫の刺咬による感染症が、毎年のように報告されている。登山、森林作業、農作業など野外作業機会の多い中高年者を中心に、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた。

③ つつが虫病

つつが虫病は、1件届出られた。平成24年より毎年1件ずつ届出られている。80歳代の男性で、報告月は患者発生報告の多い冬から春先にあたる12月、県内にて感染したと推定された。

④ 日本紅斑熱

日本紅斑熱は6件と前年(13件)と比べ約半数の届出数であった。過去5年間の届出数は1～13件と、年毎による差が大きい。届出月はダニの活動時期に一致する5～9月に集中し、年齢層はすべて40歳以上の中高年層であり、重症熱性血小板減少症候群と同様にレジャーや農作業等の野外作業において、ダニに刺咬されたと推定された。

⑤ 野兔病

野兔病は、30歳代の女性から1件届出られた。推定感染地は県外、国内で患者発生報告の多い東北地方への旅行中、昆虫に刺咬され感染したと推定された。

⑥ レジオネラ症

レジオネラ症は5件報告された。性別は男性4名、女性1名と男性が多く、全員50歳以上の中高年層であった。病型は全例「肺炎型」で、感染地域は県内、感染経路は多くが水系感染と推定された。

(5) 五類感染症

① アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は5件報告された。性別は全員男性で、年齢は20～60歳代と幅広い年齢層から報告された。台湾への旅行中に感染したと推定された1例を除き、国内にて感染したと

推定された。

② ウイルス性肝炎(E型、A型を除く)

ウイルス性肝炎は、8月に1件届出られた。20歳代の男性で、病型は「B型肝炎」、国内にて感染し感染経路は「性的接触」と推定された。

③ カルバペネム耐性腸内細菌感染症

カルバペネム耐性腸内細菌感染症は、平成26年9月19日より全数把握対象感染症に指定された疾患であり、本年は4件届出られた。年齢は、70歳以上の男性2名、女性2名で推定感染経路は医療器具を介しての感染が1例、不明3例であった。

④ 急性脳炎

急性脳炎は、2件届出られた。70歳代の女性と5歳未満の男性で、1例から「単純ヘルペスウイルス」が検出されている。

⑤ クリプトスポリジウム症

クリプトスポリジウム症は、1件届出られた。60歳代の女性で、国内にて感染したと推定された。

⑥ クロイツフェルト・ヤコブ病

クロイツフェルト・ヤコブ病は、1件届出られた。70歳代の女性で、病型は「孤発性プリオン病」であった。

⑦ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、1件届出られた。40代の男性で、手術創よりA群溶血性レンサ球菌が分離されている。推定感染経路は創傷感染であった。

⑧ 後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は8件の届出があり、過去5年間で最も多い報告数であった。年齢は20～40歳代、性別はすべて男性、病型は「患者」1件、「無症候性キャリア」7件であった。推定感染経路は、不明2件を除き同性または異性間の性的接触であり、感染地域は不明1例を除き国内にて感染したと推定された。現在、保健所を中心に利用者の利便性に配慮した無料検査・相談体制が実施されている。本年、報告された8件のうち、2件は県内保健所で実施された無料検査にて診断、報告された。今後もハイリスク層や検査を受けていない20～40歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、より積極的な普及啓発を推進し、HIV感染の早期発見による早期治療と感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた。

⑨ ジアルジア症

ジアルジア症は、1件届出られた。60歳代の男性で、赤痢アメーバとの混合感染例であった。

⑩ 侵襲性インフルエンザ菌感染症

侵襲性インフルエンザ菌感染症は、1件届出られた。60歳代の男性で、国内にて感染したと推定された。

⑪ 侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、前年（5件）よりやや多く7件届出られた。全例男性で、年齢は10歳未満～80歳代と幅広い年齢層から報告され、すべて国内にて感染したと推定された。

⑫ 水痘（入院例）

水痘（入院例）は平成26年9月19日より全数把握対象感染症に指定され、本年は1件届出られた。10歳代の男性で、国内にて感染したと推定された。

⑬ 梅毒

梅毒は毎年1～3件届けられ、本年も2件の届出があった。80歳代の男性と90歳代の女性で、病型は「無症状病原体保有者」、国内にて感染したと推定された。

表1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	平成27年	平成26年
二類	結核	149	153
三類	腸管出血性大腸菌感染症	10	11
四類	A型肝炎	1	2
	重症熱性血小板減少症候群	3	7
	つつが虫病	1	1
	日本紅斑熱	6	13
	野兔病	1	
	レジオネラ症	5	1
五類	アメーバ赤痢	5	7
	ウイルス性肝炎（E型、A型を除く）	1	1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	4	
	急性脳炎	2	1
	クリプトスポリジウム症	1	
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	1
	後天性免疫不全症候群	8	4
	ジアルジア症	1	
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1	1
	侵襲性肺炎球菌感染症	7	5
	水痘（入院例）	1	
	梅毒	2	3
	播種性クリプトコックス症	1	
	風しん	1	2
麻しん	1		

⑭ 播種性クリプトコックス症

播種性クリプトコックス症は平成26年9月19日より全数

把握対象感染症に指定され、本年は1件届出られた。50歳代の男性で、国内にて感染したと推定された。

⑮ 風しん

風しんは、流行の見られた前々年（30件）から大きく減少し、昨年2件、本年は30歳代の女性から1件届出られた。風しんは、抗体価の低い女性が妊娠中に罹患すれば子供に難聴など重い障害（先天性風しん症候群：CRS）が起こる可能性があることより、今後も迅速な発生報告、流行情報の提供を行ってほしい。

⑯ 麻しん

麻しんは、4年ぶりに1件届出られた。30歳代の男性で、インドネシアへの旅行中に感染したと推定された。患者周囲への感染拡大はなかった。

2 定点把握対象疾患の動向（表2）

（1）インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は8,574件であり、前年（9,668件）よりやや減少した。本年の前期流行は、前シーズンより1週早い前年第50週に流行期に入り、その後第3週にかけ報告数が急増しピーク（47.8件/定点）を迎えた。ピークの高さは過去5年間で最も高かったものの、警報・注意報の発令期間（第50～8週）は前年（第3～13週）と同じ長さであった。後期については、例年より流行開始が遅く、流行開始の目安とされる1.0件/定点を超えないまま翌年の流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4歳以下19.0%、5～9歳25.8%、10～14歳15.4%、15～19歳4.0%、20歳以上35.9%であり、前年と比較して5～9歳の割合が低く、20歳以上の割合がやや増加していた。

（2）RSウイルス感染症

年間報告数は1,679件であり、前年（1,838件）よりやや減少した。前期流行は前年の後期流行を継続し、第6週まで報告数の高い状態が続いた。後期流行は、例年より約2ヶ月早い8月下旬より報告数が増加し始め、第41週に1回目のピーク（3.9件/定点）が見られた。その後、第51週に2回目のピーク（5.4件/定点）を迎えるなど、今シーズンは流行期間が長く、全国平均を上回る報告数のまま翌年を迎えた。

年齢層別報告数では、0歳36.9%、1歳32.2%、2歳18.5%、3歳7.0%、4歳以上5.4%であり、前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が大半（約88%）を占めた。

（3）咽頭結膜熱

年間報告数は453件と、前年（582件）よりやや減少した。本疾患は、一般に4月ごろから増加しはじめ7～8月にピークを示すことが多い。本年は例年と異なり、4月下旬に県内一部で地域流行が見られたものの、報告数が大きく増加するこ

となく推移し、晩秋である第46週より増加が始まり第51週に小さなピーク（1.22件/定点）が見られた。

年齢層別報告数は、1歳以下32.0%、2～3歳33.1%、4～5歳22.5%、6～7歳6.8%、8歳以上5.4%であり、5歳以下が約88%を占めた。

（4）A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は1,418件と、前年（894件）から約1.6倍に増加した。本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年は、はっきりしたピークは見られず、年当初から初夏にあたる第28週頃までやや報告数が高かったものの、年間を通じて大きな増減は見られないまま推移した。年齢層別報告数は、0～1歳4.3%、2～3歳16.8%、4～5歳29.8%、6～7歳26.0%、8～9歳11.8%、10～14歳8.0%、15歳以上3.3%と、学童期小児の割合が高かった。

（5）感染性胃腸炎

年間報告数は7,411件であり、前年（7,894件）とほぼ同数報告された。一般に本疾患の流行パターンは、初冬から始まり12～1月頃に最初のピークを迎え、春にもう一つなだらかなピークを示した後、緩やかに減少するとされる。本年の前期流行も、前年の10月頃（第41週）より報告数が増加し始め、第1週にシーズン最初のピーク（11.4件/定点）を示した。その後、第7週より再び増加傾向となり、11週に2回目のピーク（8.7件/定点）をつけた後は緩やかに減少した。後期は10月中旬（第42週）から増加傾向を示したが、大きなピークは見られないまま越年した。

年齢層別報告数は、0～1歳27.9%、2～3歳24.3%、4～5歳15.0%、6～7歳8.7%、8～9歳6.4%、10～14歳9.7%、15歳以上7.9%と、5歳以下の乳幼児が全体の約7割を占めた。

（6）水痘

年間報告数は544件と3年続けて減少し、過去5年間で最も多かった平成24年（1,765件）に比べ約1/3の報告数であった。一般に本疾患は冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされている。本年は、秋から冬にかけて緩やかに増加したものの、大きなピークも見られず、年間を通じて低い報告数（0.1～1.2件/定点）で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳13.4%、2～3歳33.8%、4～5歳29.0%、6～7歳14.7%、8歳以上9.1%と5歳以下の報告が全体の約76%を占めた。

（7）手足口病

年間報告数は4,191件と、流行が見られなかった前年（184件）と比べ20倍以上に増加した。本疾患は、夏を中心として流行し7～8月にピークを迎えることが多い。本年の流行は、例年より早い4月下旬より報告数が増加し始め、第20週頃からは急増し7月上旬（第25～26週）にピークを迎えた。以後

は緩やかに減少傾向を示したが、10月上旬までは例年より高く推移した。ピークの高さ（16.1件/定点）は例年より高く、警報・注意報の発令期間（第20～40週）も長く、過去5年間で最も大きい流行年となった。

年齢層別報告数は、例年、5歳以下の乳幼児からの報告が9割を占めている。本年も0～1歳32.0%、2～3歳40.6%、4～5歳18.7%、6～7歳5.6%、8歳以上3.1%であり、3歳以下からの報告が約73%、5歳以下では全体の約91%を占めていた。

（8）伝染性紅斑

年間報告数は197件であった。過去5年間の推移では、流行した平成23、24年はそれぞれ729件、448件報告されているのに対し、流行の見られなかった平成25、26年はそれぞれ19件、47件と、年毎により報告数の変化が大きい。本年は、10月頃までは報告数も少なく推移したが、第45週以降増加し、12月頃には県内一部で地域流行も見られるなど、年末までやや高い状態が続いた。

年齢層別報告数では、0～1歳7.1%、2～3歳16.2%、4～5歳33.0%、6～7歳24.9%、8～9歳9.1%、10歳以上9.7%と、4～7歳の割合が高かった。

（9）突発性発しん

年間報告数は862件と、前年（934件）と大きな変化はなかった。一般に本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内での増減を繰り返しながら推移するとされる。本年もピークは示さず、季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内（0.3～1.1件/定点）で推移した。

年齢層別報告数では0～1歳81.6%、2～3歳15.1%、4～5歳3.4%と、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半（約97%）を占めた。

（10）百日咳

年間報告数は17件と、前年（25件）とほぼ同数であった。季節的な増減も見られず、報告数は一定の範囲内（0～0.04件/定点）で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳41.2%、2～3歳5.9%、6～7歳5.9%、8～9歳23.5%、10～14歳17.6%と、前年と比べ10未満の割合が増加していた。

（11）ヘルパンギーナ

年間報告数は428件と、前年（911件）から約半数に減少した。本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏季の代表的な感染症である。本年は、前年より遅い6月中旬（第24週頃）より報告数が増加し始め、第32週にピーク（2.3件/定点）を示した。大きな流行となった手足口病と比べ、増加も緩やかでピークも低く大きな流行は見られなかった。

表2 内科, 小児科, 眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	RSウイルス 感染症	咽頭結膜熱	A 群溶血性レンサ球菌 咽頭炎	感染性 胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	12/29~	906	94	9	16	254	18	1		15			1		
2	1/5~	1,534	78	16	32	193	17	6	1	10					2
3	1/12~	1,817	42	5	21	158	13			13		1	2		
4	1/19~	1,422	32	10	37	194	13	1	1	15	1		2		1
5	1/26~	830	25	6	45	144	15	1		10					
6	2/2~	519	37	4	43	133	15	12	1	11	1		4		1
7	2/9~	331	15	8	24	127	15	7	1	18	1				
8	2/16~	231	13	8	30	160	12	8		17					
9	2/23~	154	9	2	34	157	6	8		21			1		
10	3/2~	124	10	8	35	157	10	8	1	16	1		1		
11	3/9~	109	18	4	47	201	10	8		15					2
12	3/16~	124	17	5	33	167	7	5		14					
13	3/23~	100	9	10	32	143	11	14	2	12	1				
14	3/30~	69	5		27	181	7	14	1	16			2		
15	4/6~	34	11	8	22	137	6	12		13	1				
16	4/13~	32	5	12	29	141	7	12		20		3	1		
17	4/20~	16	13	13	34	103	5	40		12		2			
18	4/27~	4	4	16	34	156	8	54	2	20		5			
19	5/4~	10	4	6	22	120	11	72		20		4			
20	5/11~	31	1	4	27	128	6	97	1	19		1			1
21	5/18~	21		13	43	91	11	187	2	16		3			
22	5/25~	15		13	35	109	15	266	1	16		4			
23	6/1~	11	1	8	42	123	7	241	2	17	1	5	2		
24	6/8~	4		7	28	146	6	318	6	18		12			
25	6/15~	1		14	30	101	14	370	3	25		8	2		1
26	6/22~	1		11	26	107	8	370	3	21		7	4		1
27	6/29~	4	1	13	26	110	9	236	5	17		12	1		
28	7/6~	11		17	30	93	15	192	3	24		13	4		
29	7/13~	10		9	23	100	11	143	3	26		27	5		1
30	7/20~	1		10	20	92	6	108	1	19	1	17	2		1
31	7/27~		1	9	18	85	4	121	3	15		46	3		1
32	8/3~		10	3	19	96	6	120	4	21	1	53	1		
33	8/10~		4	7	19	102	5	145	4	24		38	3		
34	8/17~		5	6	16	66	6	131	6	22	1	24			1
35	8/24~		18	3	20	88	7	215	4	24		27	3		
36	8/31~	1	31	3	21	70	9	165	2	15		27	4		
37	9/7~	2	52	6	16	104	5	140	3	15		31	8		1
38	9/14~	2	74	2	26	96	3	125	1	11		20	9		1
39	9/21~	1	35	8	12	91	12	83	6	14		5	2		
40	9/28~	1	54	6	11	85	6	55	3	16	1	8	10		
41	10/5~	2	89	5	13	108	13	36	2	15		5	8		
42	10/12~	3	49	7	30	114	4	18	3	18		4	10		1
43	10/19~	2	70	3	24	150	17	9	7	13	1	1	10		2
44	10/26~		61	6	22	196	6	3	3	12	1	4	4		
45	11/2~		47	1	14	190	13	4	21	12	1		2		2
46	11/9~	6	66	4	22	216	7	1	7	13			6		
47	11/16~	2	63	20	31	212	17	2	16	17	1	4	9		
48	11/23~	8	85	6	16	163	8		11	17	1	2	8		
49	11/30~	7	74	20	27	201	23		12	13		4	10		
50	12/7~	1	90	15	31	180	11		16	12			12		1
51	12/14~	9	123	28	33	169	27		11	14		1	16		
52	12/21~	32	78	10	33	210	16	7	11	16			6		2
53	12/28~	19	56	6	17	193	5		1	7	1		1		
	合計	8,574	1,679	453	1,418	7,411	544	4,191	197	862	17	428	179	0	23

年齢層別の報告数は、0～1歳 38.3%、2～3歳 33.4%、4～5歳 18.0%、6～7歳 7.2%、8歳以上 3.0%であり、5歳以下の乳幼児が約9割を占めた。

(12) 流行性耳下腺炎

年間報告数は179件と、前年(51件)から3倍以上に増加したものの、平成23年(1,777件)に比べ1/10程度と、流行は見られなかった。季節的な変動も見られず、年間を通して定点あたりの報告数は0～0.7件と低値で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳 1.1%、2～3歳 15.6%、4～5歳 47.5%、6～7歳 23.5%、8～9歳 11.2%、10歳以上 1.1%であり、4～5歳からの報告数が最も多かった。

3 眼科定点報告対象疾患の動向

(1) 急性出血性結膜炎

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いままで微増微減を繰り返すとされる。本年の報告はなく、過去5年間でも毎年0～2件で推移している。

(2) 流行性角結膜炎

年間報告数は23件であり、前年(15件)とほぼ変わらず、年間を通して低値で推移した。

年齢層別報告数では、10歳未満 4.3%、10歳代 21.7%、20歳代 13.0%、30歳代 21.7%、40歳代 21.7%、70歳代以上 17.4%と幅広い年齢層から報告され、年齢による特徴は見られなかった。

4 基幹定点報告対象疾患の動向(表3)

(1) 週報告対象疾患

細菌性髄膜炎の年間報告数は2件(5歳未満～50歳代)であり、過去5年間においては、毎年1～5件で推移している。病原体は、1件からB群溶血性レンサ球菌が検出されている。

無菌性髄膜炎の年間報告数は4件(5歳未満～80歳代)であり、過去5年間においては、毎年1～11件で推移している。病原体は、1件からクリプトコッカスが検出されている。

マイコプラズマ肺炎の年間報告数は43件と、前年(26件)からやや増加した。平成24年からは毎年17～55件で推移している。本疾患は、一般に秋から冬にかけて多くなるとされるが、本年は、季節的な特徴は見られず、週あたり報告数も年間を通して低値で推移した。年齢層別報告数は、5歳未満 32.6%、5～9歳 28.0%、10～14歳 18.6%、20歳代以上 20.9%と、幅広い年齢層から報告されたものの、学童期を含む10歳未満からの報告数(約60%)が多かった。

クラミジア肺炎は、前年に続き報告がなかった。過去5年間では、平成25年に3件の報告が見られている。

ロタウイルスによる感染性胃腸炎は年間40件報告され、前年(32件)からやや増加した。春先から初夏及び初冬に報告

が多かったが夏季は報告されず、季節的な変動が見られた。

年齢層別報告数では、5歳未満 85.0%、5～9歳 15.0%で、5歳未満の乳幼児からの報告が大半を占めた。

(2) 月報告対象疾患(表3)

薬剤耐性菌感染症の総報告数は352件であり、前年(358件)とほぼ同数であった。過去5年間でも平成22年(473件)以外は350～400件で推移し、大きな変化は見られていない。

表3 基幹定点(月報)報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌 感染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌 感染症	薬剤耐性緑膿菌 感染症
1月	19	3	1
2月	40		
3月	30	2	
4月	25	2	
5月	20	4	
6月	28	1	
7月	33	1	1
8月	26		
9月	29		1
10月	30		
11月	17		1
12月	24	1	
合計	321	14	4
前年	337	14	1

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の年間報告数は321件(男性191件、女性130件)であり、前年(337件)とほぼ同数であった。年齢別報告数も前年同様に、60歳以上からの報告が多く全体の約67%を占め、男女別でも男性の報告数が女性よりやや多く報告された。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の年間報告数は14件(男性5件、女性9件)と、前年(14件)と同数であった。年齢別では、10歳未満 57.1%、40歳代 7.1%、50歳代 7.1%、60歳代 7.1%、70歳以上 21.4%と、10歳未満からの報告が最も多かった。

薬剤耐性緑膿菌感染症の年間報告数は4件(男性3件、女性1件)であった。過去5年間では、毎年5件以内の届出数で推移している。

5 性感染症定点報告対象疾患の動向(表4)

性感染症の総報告数は652件と、前年(652件)と同数であった。男女別では、男性335件(前年347件)、女性317件(前年307件)と男性、女性とも前年と大きな変化は認め

られず、疾患別においても性器クラミジア感染症（38.5%）、性器ヘルペスウイルス感染症（44.6%）の割合が非常に高く、次いで尖圭コンジローマ（8.9%）、淋菌感染症（8.0%）の順であった。

表4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア 感染症	性器ヘルペス 感染症	尖形 コンジローマ	淋菌 感染症
1月	26	25	4	6
2月	24	12	1	6
3月	24	33	3	2
4月	22	23	5	5
5月	15	30	5	
6月	9	32	5	1
7月	16	19	12	5
8月	22	29	4	8
9月	23	27	2	6
10月	28	17	6	7
11月	18	18	8	3
12月	24	26	3	3
合計	251	291	58	52
前年	277	280	55	40

性器クラミジア感染症の年間報告数は251件と前年（277件）よりやや減少し、季節的な変動は見られず年間を通じて報告された。男女別では男性190件（前年190件）、女性61件（前年87件）と男性に変化はなかったが、女性の報告数が減少し、全体では男性（約76%）が多数を占めた。年齢別報告数は、10歳代7.2%、20歳代36.3%、30歳代30.7%、40歳代19.1%、50歳代以上6.8%と、20～40歳代からの報告が多かった。

性器ヘルペスウイルス感染症の年間報告数は291件（男性59件、女性232件）であり、前年（280件：男性77件、女性203件）とほぼ同数であったが、男女別に見れば男性の報告数はやや減少し、女性の報告数は増加していた。また性感染症全体では、男性が女性より多く報告されているが、本疾患は女性が約8割を占めるなど、女性の割合が他の疾患に比べ高かった。年齢別報告数は、10歳代1.0%、20歳代22.7%、30歳代21.6%、40歳代20.3%、50歳代15.5%、60歳代10.0%、70歳代以上8.9%と、20～40歳代がやや高かったものの、各年齢層から報告されていた。また、60歳以上の高齢者からの報告数が19.7%と他の性感染症と比較して多い傾向が見られたが、潜伏していたウイルスによる再発の可能性も考えられた。

尖形コンジローマの年間報告数は58件（男性39件、女性19件）であり、前年（55件：男性44件、女性11件）とほぼ同数報告された。男女別では性器クラミジアと同様に男性が約7割と多かった。年齢別報告数は10歳代5.2%、20歳代32.8%、30歳代37.9%、40歳代13.8%、50歳代6.9%、60歳以上3.4%と、他の年代に比べ20～30歳代からの報告割合が全体の約71%と高かった。

淋菌感染症の年間報告数は52件と平成24年（19件）から3年連続で増加し、過去5年間では最も多い報告数となった。男女別では、男性47件、女性5件と性器クラミジア、尖圭コンジローマと同じく男性からの報告が多く、約9割を占めた。年齢別報告数は10歳代9.6%、20歳代32.7%、30歳代26.9%、40歳代23.1%、50歳代3.8%、60歳以上3.8%であった。他の性感染症と同様に、20～40歳代の割合が高く全体の約90%と高かった。

IV まとめ

平成27年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた。

全数把握対象疾患では、例年同様「結核」が最も多く全体の約7割を占めた。報告数は前年とほぼ同じであったが、年齢別に症状を見た場合、60歳以上では「患者」が大部分を占め、「無症状病原体保有者」の職業別では医療・介護などの施設関係者が多く見られたことより、施設関係者に対する感染予防啓発、施設においては施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

腸管出血性大腸菌感染症の報告数は、平成24年6月の厚生労働省通知による牛生レバーの提供禁止以降減少し、本年も少なかった。しかし、夏季を中心に報告は続いており、多くが国内にて感染したものと推定されることより、今後も迅速に流行情報の提供を行っていきたい。

「重症熱性血小板減少症候群」や「日本紅斑熱」などダニや昆虫の刺咬による感染症が、野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告された。また県内での報告は無かったものの、全国的には蚊媒介性感染症である「デング熱」「チクングニア熱」が多く報告されていることより、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識とともに、海外旅行者に対し予防対策の啓発も重要と考えられた。

平成25年に流行した「風しん」は、少数ではあるが毎年報告が続いている。さらに本年は「麻疹」が4年ぶりに報告され、海外旅行の際に感染したと推定された。ワクチン接種による感染予防啓発が不可欠と考えられた。

定点把握対象疾患では、冬から春先にかけて「インフルエンザ」、 「感染性胃腸炎」が流行した。夏風邪の代表とされ

る「ヘルパンギーナ」は前年の約半数に減少したが、「手足口病」は平成 23 年以降、最も大きい流行年となった。また例年秋口から流行が始まる「RS ウイルス感染症」は、例年より流行開始時期も早く 3 年続けて流行が見られた。

眼科定点報告疾患では、急性出血性結膜炎、流行性角結膜炎とも前年と変化なく、流行は見られなかった。

基幹定点報告疾患は、週報告対象疾患である細菌性及び無菌性髄膜炎、マイコプラズマ肺炎も年間を通じて報告数は低値で推移したが、ロタウイルスによる感染性胃腸炎は、春先から初夏及び初冬に報告が多く、季節的な特徴が見られた。

月報報告対象疾患である薬剤耐性菌感染症については、総

報告数に大きな変化は見られず「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。

また、性感染症患者についても総報告数は前年と同数であり、男女別報告数も前年と同様に男性からの報告が多かった。報告数の多い 20～30 歳代の男性を中心に予防啓発、注意喚起を行うとともに、10 歳代からの若年者に対する予防教育も重要と思われた。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行っていき